椎の木

豊島与志雄

青空文庫

がけの上のひろい庭に、大きな椎の木がありました。何百年たったかわからない、古い大きな木でした。根かぶが張りひろがり、幹がまっすぐにつき立ち、頂の方は、古枝が枯れ落ちて、新たな小枝がこんもりと茂っていました。朝日がさすと、若葉がさわさわと波だち、椋鳥や雀がなきたてました。

春さきのこと、あたたかいそよ風が吹いて、この椎の木も笑ってるようでした。

その根もとに、二匹の鼠がかけまわっていました。小さいのが、根のはりだしたかげにかくれていますと、大きいのが、とびついてきます。とたんに、小さいのは逃げだして、根かぶの向うがわにまわります。大きいのは追っかけてゆきます。小さいのはまた逃げだします。そして、根のまわりをぐるぐるまわったり、立ちどまって相手のようすをうかがったり、逆にまわったりします。

そのうちに、こんどは大きいのが逃げ、小さいのが追っかけます。鬼ごっこをして遊んでるのでした。

ところが、大きいのが、何かのけはいを感じて、じっと立ちどまりました。小さいのがとびついてきても、身動きもせず、ふりむきもせず、あちらを見つめています。首をすこしかしげ、耳をたて、長い尾をぴんと伸ばしています。

――なんだか、あやしいぞ。どうもそうらしい。あ、そうだ。これはいけない。

大きい鼠は一声たてて、逃げだしました。小さい鼠もそれにつづきました。

そして二匹の鼠は、いっさんに、がけの下へかけおりて姿をかくしてしまいました。

そこへのっそりと、一匹の三毛猫がやって来ました。椎の木の根のあたりをうそうそとかぎまわりました。

――これはおかしいぞ、こんなところに、鼠がいるわけはないが、どうも鼠くさい。おれが退屈してるように、鼠も退屈して、こんなところへ出て来たのかな。それにしても、俺が来たからって、逃げなくてもいいんだがなあ。俺はちょっとふざけてみせるだけで、鼠なんか食やしない。猫はそのあたりをかぎまわって、それから、落葉の上にねそべりました。

――鼠でてこい、鼠でてこい。いっしょに遊ぼうよ。

そんなことをぼんやり考えながら、猫は眼をほそめて、うっとりと眠りかけました。春の日があたたかくさして、落葉の上はよい心地でした。

やがて、遠い人声に猫はすこし眼を開きました。

青い大空に、なにか一筋、ほそいものがかかっていました。たいへん高いようでもあれば、すぐ低いようでもありました。

猫ははっきり眼を開きました。

見ると、一筋の糸が、椎の木の上へのびていました。糸の先には、赤い絵のかいてある凧が、ふらりふらりとたぐりよせられていました。

椋鳥がとんでにげました。

凧はだんだん近くなりました。右にかたむき、左にかたむき、あぶなっかしいようすでしたが、にわかに、がくりとかたむいて、さかさまになりました。糸が椎の木の枝にひっかかったのです。そしてそのままたぐりよせられたので、凧までも枝にひっかかってしま

いました。

——ばかなことだ。とうとうひっかかってしまった。猫は立ちあがって、背のびをしましたが、またそこにねそべって、眼をつぶりました。

一郎と二郎が、凧の糸をまきとりながら、椎の木の下にやって来ました。

一郎は上を見あげながら、凧の糸を、ちょっちょっと引っぱり、ゆっくり引っぱり、強く引っぱってみました。そのたびに、椎の葉と凧がゆれ動くだけで、凧はそこからはなれませんでした。

「だめなの。」と二郎は尋ねました。

「うん。」と一郎は答えました。

「さおをもってこようか。」

「届きやしないよ。」

「はしごをもってこようか。」

「あんなとこまで、登れやしないよ。」

「石を投げつけてみたら……。」

「ばか、破けるばかりじゃないか。」

それで、二郎はもう手段がつきました。うらめしそうに凧をあおぎ見ました。

「兄さんがいけないんだよ。僕がもうやめようというのに、糸をすっかりくりだしてしまうんだもの。」

「風がなくなったのがいけないんだ。きゅうになくなったんだから……。」

「風がきゅうになくなるの。」

「なくなるよ。きゅうに吹いてくることがあるだろう。だから、きゅうになくなることだってあるさ。」

「でも、ゆっくり吹いてくることもあるよ。」

「うん。ゆっくり吹いてきて、ゆっくりなくなることもあるさ。」

一郎はまた凧の糸をいろいろに引っぱってみました。だめでした。

「お前やってごらんよ。」

二郎は糸を受け取って、いろいろに引っぱってみました。

一郎はあたりを見まわして、三毛猫を見つけました。

「おや、ミミーがこんなとこにねてるよ。」

一郎は猫を抱いてきました。そして、椎の木に引っかかってる凧を見せました。

「ミミー、この木に登って、あの凧を取って来いよ。いいか、取って来たら、うまいものをあげるよ。取って来いよミミー。いいか、ミミー。」

一郎は猫を椎の木にだきつかせました。猫はそこに爪をたててちょっと止まりましたが、身をねじりながら、ぱっと地面にとびおりました。

一郎は笑いました。

「ミミーもだめだっていうよ。あきらめようよ。」

二郎は考えこみました。それから、きゅうに眼をかがやかせました。

「そうだ、植木屋にたのもう。近いうちに植木屋が来るって、お母さまが言っていらしたよ。植木屋なら、あすこまで登れるよ。」

「ほんとに来るのかい。」

「ほんとだよ。お母さまに聞いてごらんよ。」

「そんなら、凧をつないでおこう。」

糸を切って、そのはじを、つつじの木にゆわえつけました。
そして、二郎は糸巻をもち、一郎は猫をだいて、あちらへ行きました。

椎の上枝のへんは、にわかに、そうぞうしくなりました。そこに住んでる多くの椋鳥が、凧のことでしばらく静まりかえったあと、いっそうにぎやかに飛びかい、なきたてました。
そこへ、一羽の烏がとんできて、上枝にとまりました。椋鳥たちはちょっと黙りました。
烏は用心ぶかくあたりを見まわしました。それから、じっと凧を眺めました。凧にかいてある赤いひげだるまの絵を、うさんくさそうに眺めました。
その近くに、一羽の椋鳥がとびだしてゆきました。
――いやな奴が、またやって来たな。
だが烏は、じっとしていました。
椋鳥は眼をぱちつかせて、烏を見ました。
――おかしいな。こいつは、いつもいやな声で、カアカア鳴きたてるくせに、今日はどうして黙ってるのかしら。
烏は椋鳥に眼もくれないで、地面をあちこち眺め、それからまた、凧を見ながら、しきりに首をかしげています。
――ははあ、凧をこわがってるんだな。
そう思って、椋鳥はあざ笑いたくなりました。
――こいつは、ほんとにまやかし者だ。たいへん威勢がよさそうで、じつはひどくおくびょうだ。たいへん大胆なようで、じつはひどく用心ぶかい。どこかまぬけのようで、じつはわるがしこい。ほんとにまやかし者だ。烏はまだ、鳴きもせず、まばたきもせず、凧を眺めていました。
――凧がそんなにこわいのかな。それとも、なにかたくらんでるのかな。
椋鳥は凧のそばにとびうつりました。
烏は、椋鳥ではなく、やはり凧を眺め、地面をあちこち眺め、また凧を眺めました。
椋鳥はもう、なんだかがまんしかねました。くちばしで凧をつついてみせました。かさかさと音がしました。それでも、烏はまだじっと凧を眺めていました。
椋鳥はまた凧をつつきました。それから、凧の上、赤いひげだるまの顔のあたりに、とび乗って、足でひっかいてやりました。ばさっと音がし、ばりっと破けて、凧はぐらりとかたむきました。
烏は大きな翼をひろげて、風のように飛んでいってしまいました。
椋鳥はなかばひろげた翼をひらいて、飛びあがろうとしました。ところが、片足が凧の紐（ひも）にひっかかっていました。凧の四隅（よすみ）や中程についてる紐が一つにまとめてあるその真中に、足をふみこんだのです。
椋鳥はあわてました。片足にからんでる紐を、ほかの片足でけおとそうとして、そちらにも紐をからませ、両足をすり合せばたつかせて、ますます紐をからませました。と共に、飛びあがろうとして力いっぱいに羽ばたきをしました。
凧はゆれ動いて、枝からはなれました。枝にかかってる凧糸が、一方は地面のつつじの木につながれたまま、ぴんと張りきり、ついに切れました。

椋鳥は一生けんめいに羽ばたきしました。しかし、足に凧をつけたまま飛ぶほどの力はありません。凧といっしょにふらりふらりと地面へ落ちてゆきました。

椋鳥はもう羽ばたきをやめました。横ながれにばさりと地面へ落ちました。

そしてしばらく、椋鳥はけわしい息をつきました。

声や音がしました。一郎と二郎が、あちらから走ってきます。三毛猫もいっしょにかけてきます。

椋鳥は立ちなおりました。生命のあやういことがかえって気をおちつかせました。翼をおさめ、片足を静にもちあげました。足は凧紐からぬけました。ほかの片足をもちあげると、それもするりとぬけました。

一郎と二郎と猫は、すぐ近くまでせまってきました。

椋鳥は横手ななめに眼をすえて、ぱっと飛びたちました。飛びあがってしまえば、羽ばたきに力がこもって、ぐんぐん速くなりました。

がけの外にいで、大きく半円をえがいて、若葉のでだしてる椎の木にとまりました。

破れてる凧の上に、三毛猫はとびつきました。

「ミミー、ミミー、おどきよ。」と一郎は叫びました。

二郎は凧をとりあげました。あちこち破れ、ことに、赤いひげだるまがひどく破れてるのを、じっと、眺めて、泣きだしそうな顔をしました。

一郎は凧の破れ目をしらべました。

「あの椋鳥が破いたんだ。ほかのとけんかして、凧にひっかかったのかもしれないよ。」

そのあたりに、椋鳥の小さな羽毛が落ち散っていました。猫はそれをかぎはじめました。

――おかしなことだ。さっきは鼠のにおいがしていたし、こんどは小鳥のにおいがしている。こんなところに小鳥のにおいがするとは、どうもへんだぞ。

猫はかぎまわって、がけの方まで行き、遠く見わたしました。日の光と人家ばかりで、なんの変ったものもありませんでした。一郎は猫のあとを見やりながら、二郎に言っていました。

「凧にだるまの絵なんかかいてもらうからいけないんだよ。僕が張りかえてやるから、こんどは竜の絵をかいてもらえよ。」

「だって、竜の絵は、黒い雲ばかりで、まっ黒だよ。つまんないや。」

「赤いんだってあるさ。真赤な雲の中に、真赤な竜がおどってるのは、すてきだよ。」

「そんなの、太田先生がかいて下さるかしら。」

「僕がたのんでやるよ。」

「でも、このひげだるまも、とてもよかったよ。」

「そんなにすきなら、ちゃんとした紙にかいてもらおう。僕がたのんでやるよ。」

「うん。」

二郎は泣きそうな顔をやめて、にっこり笑いました。

「だが、おかしいなあ。木の上の凧を、椋鳥が取ってくれるなんて……。」

一郎はつぶやきながら、猫を呼びました。

「ミミー、ミミー……。」

猫は立ちどまって、一郎の方を眺めました。

——小鳥のことかもしれないぞ。

猫はかけて来ました。

一郎は猫をだきとりました。そして二郎といっしょに、あちらへ行きました。

椎の木の上には、多くの椋鳥がさわいでいました。

それらの椋鳥のなかに、さっきのいたずら者の椋鳥も、もうたち戻っていました。

彼は羽毛をすこしいためていました。それを、くちばしでなでつけて、身づくろいをしました。いまいましくもあれば、またとくいでもありました。

——あの烏のせいだ。こんどやってきたら、つっついてやろう。だが、危いところだった。俺もすこしあわてたかな。それにしても、ふしぎだなあ。ふだんとまりなれた木の上で、凧にひっかかり、とまりなれない地面の上で、凧からぬけだしたんだからな。これには、なにか、俺の思い及ばないことがありそうだ。まあゆっくり考えてみよう。こんなことは生れてはじめてだ。いや、誰にもはじめてだ。俺一人が知ってることだ。

椋鳥は身づくろいをすまして、一声たかく叫びました。そして、椎の木のいちばん高い枝にとびうつりました。そこから、四方を眺めました。

風はやみ、うららかな春の日で、遠くはぼーっとかすんでいました。近くの低い木の茂みに、雀の声がかすかにしていました。椋鳥は二三度鳴きたてました。それがあいずでした。そして飛びたちますと、ほかの椋鳥もついてきました。一群れになって、中空をさーっと飛んで、近くの木立へ遊びに行きました。

この一群れが飛びたつ羽風に、椎の古葉がいくつも散って、はらはらとまい落ちました。

そこへ、また三毛猫が出てきました。ちょっと椎の木を見あげたきり、のっそりと歩きつづけました。鼠のことも小鳥のことも、もう忘れてしまってるらしいようすで、鼻も耳も動かさず、平気な顔つきをしています。

ところが、ふいに、猫は立ちどまりました。つつじの木にゆわえられた凧糸が、切れて地面に横たわってる、その糸のそばに、こがね虫が一匹はいだしていました。

猫はこがね虫をじっと眺めました。それから、右手をそっと差し出して、虫の背にさわるかさわらないかぐらいに、ちょっかいをだしました。こがね虫は、すぐ、そこにすくんで、頭も足もちぢこめてしまいました。

猫はまた右手を差し出して、こんどはほんとに、虫の背にさわってみました。虫は身体ぢゅうをちぢこめて、身動きもしませんでした。いつまでも動きませんでした。

猫はまた右手を出しかけて、やめました。

——おかしな奴だな。生きてるのか死んでるのか、さっぱりわからん。

猫は虫をかいでもみないで、椎の木の根もとの方へ行きました。だいぶしばらくして、こがね虫はしずかに頭をもたげ、足をのばしました。そしてはいだしました。

凧糸が地面にのびてるそのわきを、すれすれに、こがね虫ははってゆきました。先の方になると、糸は椎の木から落ちて不規則にこんぐらかっています。そこまでたどってゆくと、こがね虫は立ちどまりました。立ちどまって、みじかいしょっかくだけを動かして、しばらく考えました。

——はてな、どうしたものかなあ。どちらへ行くとしようか。

こがね虫は迷ったあげく、羽をひろげて、飛びあがりました。ぶーんと羽音をさして、まっすぐに飛んでゆきました。そしてすぐ、その姿は見えなくなりました。

こがね虫のかわりに、椎の古葉が一枚、ひらひらとまい落ちてきました。その古葉が落ちたあたりに、ほかの落葉の上に、三毛猫はもうまるくなって眠っていました。そこはあたたかく日がてっていました。

椋鳥の群れはまだ戻ってきませんし、あたりはおだやかで静かでした。猫は時折、うっすらと細眼をあけて、でも何も見ずに、またすぐ眼をふさいで眠りました。

大きな椎の木も、日の光のなかに静まりかえって、うっとりと眠りかけてるようでした。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系　第一六巻」ほるぷ出版
　　1977（昭和52）年11月20日初刷発行
底本の親本：「シロクロ物語」国立書院
　　1948（昭和23）年10月
初出：「赤とんぼ」実業之日本社
　　1946（昭和21）年4月
入力：菅野朋子
校正：門田裕志
2012年1月31日作成
2012年12月19日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

椎の木

豊島与志雄

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/